

『教育ジャーナル』一九六六年一月（学習研究社）

学校給食をたしかなものに



矢口 新

高校の給食について

現在わたしの勤めている所は、地階に食堂があつて、そこでだいたい定食を食べている。セルフ・サービスでアメリカ式なのである。みんな並んで定食のお盆を次々に受け取つてはテーブルへ行って、それを片づけてまたセルフ・サービスでお盆を返して食堂を出て行く。これも給食の一種だといつてよいようである。

しかしさすがに同じ食堂の食事が毎日続くと、時にはやり切れなくなつて別なものにしたくなる。その食堂は定食のほかにサンドイッチとか、ライスカレーとか、ミルクとトーストなどがあるから、そういうものにする時もあり、時には外へ散歩がてらに出かけることがある。それだけの自由があることはよいことである。いつでもよそへ行けるといふことだけで、たいていは食堂ですましてしまうのである。せいぜい週に一度ぐらいで、やは

り結局は便利な食堂ですますことになる。ついでにいうと定食の値段は百二十円である。

高等学校の生徒に対する給食の話が出たときに、みんながすぐ賛成する気になれなかつたのは、どういう心理からであろうか。微妙なものがあるのである。おそらく、小、中学校の形のあの教室の中で、給食当番が世話をして食事をするあの光景を思い浮かべたからではないだろうか。事実わたしも昔の軍隊生活を思い浮かべた。めしあげといつて当番が桶をひっさげて来て、アルミの食器に飯を盛る風景を思い浮かべた。それはいかに貧乏くさい風景である。せめて食堂ぐらいはあつてもよいではないかという気がする。そういう点は小学校、中学校でも同じことである。それががまんできるのである。なんとなくではあるが、まあ中学校ぐらひまではそれでもよさそうだといいことらしい。もっと具体的に考えると、小学生ぐらひではまだ食堂へ行ってセルフ・サービスでやること

はちよつと無理かも知れないということも考えられる。全部並べてやるというようなことになつたら、大ぜいのことだからたいへんである。そういう点からも今の形の給食で行くよりほかに手がないともいえるのである。つまり小学生・中学生は、あてがいぶちで食べてもらうよりしかたがないということになる。そして、やはり給食当番でも決めてやるのがいちばんよい手だ。いろいろな条件から考えて、そこに落ち着くのであろう。それがなんとなくよいことだの意味ではないか。

高等学校ともなると、それよりも少し生徒に食事をするという気持ちを味わわせてやりたいと思うのではないだろうか。せめて食堂でやれないかなどというのはそういう気持ちである。

さてそれでは現在の高校生の実態はどういう食事をしていのかを調べてみると、これは決して真つ当な昼食をしているわけではない。ひどいものになると、育ちざかりの連中がコッペパンに牛乳ぐらひですましているといふのである。それよりいいといつてもコロッケパン、サラダパンといった程度のものであるらしい。そんなのを三つ四つかじつて腹一杯にする。それでもクラブの運動の激しい時は到底もたないといふのである。こういふように見ると、どうも日本人の昼食というのはたしかに貧乏くさい。それでも

どうかすると、一食百円を突破する。そしてそれは一般にはかなりな負担なのである。結局三十五円の鮭の一切れに米をギューギューつめこんだ弁当がもちがよいということになる。安上がりでもある。

そうすれば一食五、六十円の給食ということにして、大量に扱えばかなりなカロリーを与えることができるではないかという議論は誠に正当であるといわざるを得ない。それが今のところ最低欠くべからざることだということになるのではないか。

給食というのは、何よりもまず日本人の貧乏たらしい昼食観を払拭する所から始めなければならぬのであろう。もつとカロリーを、もつと栄養をとという態度で給食が行なわれて来ているのである。小、中学校が現在行なっている給食というのは、そういうものとしてみれば、やはり子どもの健康に貢献しているということになろう。

救貧政策と学校給食

最近、へき地の給食のことが問題になっている。貧乏な日本をへき地が最もよく代表してくれている。弁当を持ってこない子どもがいるのだから、これはなんとかならないものかと考えるのは当然である。しかし本質的にはこれは社会政策の問題であって、学校が給食を考える前にしなくてはならぬことがある。

るのである。そういう基礎的なことが行なわれていないから、学校が給食をしようとしても、それにも問題が起こってくるのである。なまじつか手を出して給食などをやり出したら、苦労ばかり多くて、たいへんだということである。いや苦労はいとわれないにしても、事実上どうしても成り立たないのである。

そういう状態を給食の問題として処理しようというのはいかにも政策が貧困だといわざるを得ない。学校で給食をするのをそういう救貧対策の問題として位置づけたのは学校がかわいそうである。それでは教育の問題ではなくなるといってよいであろう。しかし事実として目前に弁当を持ってこない子どもがいるのだから、それを処理しなくてはならぬことは当然である。関係者たちはいっしょうけんめい努力しているようだが、末端の当事者には切実な問題だけにつらい。目の前に問題が起こっているのである。なんとかしなくてはならぬと思うてやっている。そういう点では学校の先生がいちばん責任を負わされる。いな自ら責任を負って奮闘するのである。給食の事務を背負っているのである。その事務だつてばかにならない。ずいぶんよけいなこともやっているのである。それを言おうというのではない。

本来社会の仕事としてあるべきものを、責任ある所が目をつむっているから別の人が

責任を負わされているのである。そういう不合理なことも学校の先生はだまってる。学校給食がよけいなことまで背負いこむのでは、学校給食の本来の意義、教育的な意義は失われてしまふのである。そんなことなら給食はしないほうがよいではないかといわれる。学校給食が救貧対策の面を背負いこまされていることからくる不合理さを、みんなががまんしなければならぬ、ということはないだろう。そんなことなら弁当をもって行つてかまわないのである。ということは何も貧乏のおつきあいがいやだということではないのである。

何か不合理な考え方、みそもくそもいっしょにしている考え方がいやなのだ。これはかなり多くの両親、教師の考え方だと思う。そういうことが大きい声にならないのは、何かもやもやして、はっきり問題がつかめないからだと思う。聞いているわたしもどうもよくわからないが、気持ちにはよくわかったつもりである。やっぱり学校の給食として取り扱われるなら、救貧対策ではないはずである。それは日本人の健康教育の問題であり、食生活習慣の合理化、健全化の問題であらう。そういう意義をはっきり打ち出して、その面から給食を改善して行く努力が行なわれなければならぬのではないか。

事が食事のことになるから、むずかしいこ

とはある。最低生活の人でも食事はするのだから、そういう幅のあることを地盤にして考えなければならぬ所に、むずかしさがある。同時に、そのミニマムが強調されると、平均化されて、最低へとレベルが下がる。そうすると、それは学校給食でなくなつて、救貧対策になつてしまふのである。

へき地のことが問題になつてゐるが、救貧対策的な見地で学校給食を処理されたのではやり切れない。もつと前向きな姿勢で問題を取り扱わなければならないであろう。

学校給食の課題

学校給食も長い歴史をもつに至つたが、こゝらで考えてみるべき問題もあるのではないか。戦後の社会の中から生み出されたものは、何かにつけてその影響を強く持つてゐるが、学校給食も戦後の食生活の貧困な時代の考え方をそのまま持ちつづけてゐるといふことはないか。もう戦後ではないなどというよゝうな一般的なことをいうのではない。経済成長を遂げて豊かになつたから戦後とは違ふといふでもない。経済成長を遂げてそのひずみが大きいことは前に述べた事情にも十分出てゐる。だからそんな一般的なことをいうのではない。しかし十年一昔というよゝうに何事も十年もやつていれればおのずから時勢の変化もある。それに応じて修正をする

ところもあるうし、十年も経験してゐるとその経験の蓄積だけ新しいアイデアが浮かぶものである。

もつとキメの細かい方法ということも考えられてくるものである。そういう点から考えると、終戦後の社会の中で実を結んだ学校給食の姿がそのままいまだに行なわれてゐるとしたら、やはりおかしいのである。いや実際には十年、十五年の間に徐々に目に見えない形で変わつてきてゐる。施設や設備もずいぶんりつぱになつたのである。

それはそれでいいと思うが、もう一つこゝらで考えてみるべきことがあるのではないだろうか。

まず早い話が、へき地の弁当を持つてこゝないよゝうな事情にある土地の学校給食と、そうでない土地の学校給食とは、本質的に違ふ問題として取り扱われなければならないはずであるが、学校で給食をするから、ともに同じ給食の問題だとして十ば一からげに扱われたのでは、学校給食の問題はどこかに飛んでしまふのである。

前者のごときは今から十五年前の時代の終戦後の社会においては、もつと一般的にあつて、日本の学校給食の中心問題であつたかも知れないが、今はもうそれは学校給食の問題でなくなつてゐる。それを問題にするよゝうな態度で、一般の学校給食を問題にしたので

はまったくピンとはずれといわざるを得ないのである。

学校給食の中心問題は食生活習慣の形成にあるのではないか。日本の食生活習慣は現代でも決して合理的であり健康的であるとはいへない。とくに前述のごとき昼食に関してはそうである。りつぱなおとなが昼食にうどん一杯というのは決してよいことでない。それは個人の好みとばかりいつていられないものがある。でき上がった成人にはそれらもう強制することはできないが、子どものころから、合理的な健康な食生活を作り上げる努力をすることはたいせつであらう。

そうなつてくると、小中学校の低学年から高学年まで、千ペン一律のあてがいぶちといった形の学校給食が果たしてそれでよいのか、ただ食べさせておけばよいといったよゝうなものを続けて九年間も食べさせておいて栄養さえあればそれでよいと考えてゐてよいのか。そういう点がこれから本格的に考えられてよいことであらう。

日本人はもつと食事というものに厳密な考え方をもつてもよい。飲んだり食つたりではなく、食事というものは人生に大きな役割を果たす要素である。給食ということはそこにつながるのではないか。

(プログラム教育研究所長)